

# イヌの居る風景

## －野生との境界を考える

五味 靖 嘉

残暑が強い2004年初秋のこと、なれ親しんでいる柴犬のリュウを連れて自宅裏の海拔300m足らずの小さな山に出かけた。山頂までは僅かな距離でも、急峻であり息切れがする。登りきった所で一息入れ立ち止まった足元を見ると巨大なアオダイショウがとぐろを巻いて居座っているのが目に入った。私は後方から来るリュウに見つけられないよう何気なく方向を変えて歩み出したが、私の行動異常を感じ取ったのか、あるいは匂いがあったのか、アオダイショウの居る方向に近寄ってしまった。私が振り返った時には、2m以上あろうかと思われるそのアオダイショウが、一瞬早く落ち葉の上を滑るように西側斜面を逃げ出したから大変である。

犬は斜面を追いかけながら下ってしまった。私はそれを見捨てる振りをしてながら散策を続けおよそ20～30分は経過しただろうか？息を切らせてリュウが戻ってきた。嬉しそうでもあるが何やら異常な感じもした。良く見ると血痕が口吻周囲と前肢に付着しているの、これは明らかに巨大アオダイショウとの顛末を示している、と、判断できた。

犬には済まないが、ヘビが嫌いな私は不愉快なので無視する事にしたが、リュウは「おれについて来い」と言わんばかりの行動に出た。私は2～3度繰り返すリュウの行動で「案内をしている」と感じたが、それでも気味が悪いので避けるようにし、リュウとは方向を換えて藪のなかを下り始めていた。

リュウは私に近づき、飛び掛り始めたりするので無視すると、行動を一段とエスカレートさせて血痕の付着した口吻で私の足や手を舐めようとする。これだけはどうしても避けたかった。

私はとうとうリュウに妥協し、仕方が無くその後に従うと、足取り軽く前に進んでは戻る、を繰り返して、暫くして林道に下りる直前に、アオダイショウの死骸が横たわっているのを発見した。リュウは、私に自慢するかのようにその死骸を啜って見せたり、

口吻を器用に使って転がしたりする。間近に見ると、ヘビの頭部よりも心臓部分が噛み砕かれ千切られており、見事に急所を攻撃していたことが判る。

登山をする方は、柴犬と山に入るとクマを察知して教えてくれる、山菜取りの大ベテランが迷子になって柴犬に方向を教えられた、水呑場に集まる小鳥を狙い捕らえるなど・・・犬との関係には予想を超え、驚くような行動・仕種が見られる。こうした例は、実は、「犬が飼い主を守った」などの様な美談に進展しかねないのであるが、一方で、科学では計り知れない人と犬との信頼関係が縄文時代からアニミズムとして続いていたのであろうと想像できる。

人間中心の考えでは自然界を加工することが、豊かな進歩であると信じて、これまでに我々の生活を便利に築き上げてきたが、その反面、自然破壊や生態系の崩壊などから、人類の生存が脅かされるようにもなった。科学技術の発展で”癒しのロボット(犬)”なども登場したが、本稿でこれを語るのはいささか難しい時代になった。遺伝学分野でのDNAは、すべての動植物が二重の螺旋構造によって支配されるという。しかも、人と猿などの場合を例にとっても、遺伝子の相違は極めてわずかだと言う。こうした様々な研究分野の存在もあって、アニミズムなどの議論が活発になってきた。だからあらゆる生物との共存が必要だという、これまで人間中心の”脅かされる生活”からの反省が論じられるようになった。

縄文時代からヒトとイヌの暮らしには、死後もイヌと一緒に埋葬するなどの特別な関係、アニミズムがあった。近年は僅かな愛犬家のみによって、在来種の柴犬が保存されるだけとなった。こうした悠久の歴史を遡って考えると、そこにはイヌと野生動物との境界線上に人ととの暮らしが営まれていたという事実が見えてくる。ネズミやヘビが出たら犬は追い回し捕獲もした。キツネやタヌキが現れると吠え、猿が出没すれば激しく威嚇し追い立てる。鹿や猪が現れると威嚇し追い散らし、時には捕獲さえする。熊が出ると激しく吠えそして威嚇し、人ととの暮らしの境界線を設けていたのではないかと？

このような風景の中では、人と犬の間で、一方的にイヌを飼育するとか訓練するなどのような関係は見えてこない。近年騒がれるような”野生動物との軋轢”は滅多に見られなかったに違いない。それは、ありのままの暮らし(自然)の中でイヌは素直に人ととの暮らしやその周辺の環境に適応していたことを思い描くことができるような風景が見えてくるのである。

(2005. 8. 25記)

